



黄金色に実った小麦畑。待ちに待った小麦の収穫の様です。大地の恵みを肌で感じ、喜び子どもたちは元気一杯。わかくさ幼稚園では、食べものをひとつの「いのち」のサイクルととらえ、種まきから収穫まで体験している



学校法人 総純寺学園 わかくさ幼稚園
副園長 加納精一さん

「シュタイナー教育」を実践する「わかくさ幼稚園」



子どもの未来を救うのは 英才教育ではなく感覚教育です

独自の世界観「人智学」を提唱し、広範な精神運動を創始したドイツの思想家・ルドルフ＝シュタイナー。彼はまた教育家としても熱心で、芸術を重視した自由教育運動「自由ヴァルドルフ学校」は世界的に有名です。日本ではまた馴染みの薄いシュタイナーの教育理論ですが、かれの理論に学び、個性を尊重した自由な教育を行っている幼稚園があると聞き、岐阜県岐阜市の「わかくさ幼稚園」を訪ねました。

わかくさ幼稚園の園内には、さまざまな形をした木片や木の実が遊具として置かれています。室内には、手作りの人形などが整然と並び、温かみのある無地の淡いピンク（生命の色）のカーテンがとても印象的です。

「既成の遊具には、それをつくった大人のファンタジーがこもっています。そこからは子供たちが創造する力は生まれません」とも、もちろん想像力も」

シュタイナーの教育理論を学び、人としての根幹をつくる幼児教育を目指している副園長の加納精一さんはそう言います。

加納さんがシュタイナーの教育理論を学ぼうと考えたのは、知育教育を偏重した現代の画一的な教育のあり方に疑問を抱いたからでした。今の教育に求められているものは、知的な学習能力や記憶力を伸ばすことではなく、「個」を育てることだ。そう考えた時、〈個を尊重し、愛と意志を育てる〉シュタイナーの教育理論の重要性を痛感したのです。

「最初は模倣から始めました。しかし、経験を積んで、思考や技術が熟成してくると、『ドイツの教育法を、そのまま輸入しているのだからか』という疑問が生まれてきました」（加納さん）

その疑問を解くためドイツに渡り、シュタイナーの教育理論に沿っ

ダイナミック農法が加わりまし

た。

「この農法は、自然界や大地や人間には一定の照応関係があるという考え方です。生命の誕生は夜明けに多いといわれますが、これは生物の体と自然界がつながっているという証ではないですか」

と語る加納さんによると、植物も曜日によって力を発揮する日が決まっているとか。月曜日は米、火曜日は大麦という具合に。

穀物の収穫には近隣のおじいちゃんやおばあちゃんと一緒に、昔ながらの方法で脱穀をするのだとか。その時、子供たちは肌で老人の智慧を感じ取り、楽しそうに穀物に触れているといいます。

脱穀したライ麦は、ふわふわのパンではなく、穀物がたっぷり入った硬い自家製パンになりますが、それを子供たちは「おいしい」と喜んで食べるそうです。

自由とは意識の開放

家庭で、母親が子供に頻繁に使う言葉に「早くしなさい」があります。しかし、早くしろとは、親の場合であり、時には親の未熟さから出る言葉だと加納さんは言います。

「怒ると叱るは違います。怒るのは感情的な表現。叱るのは、成長へのアドバイスでなければなりません」

た教育養成のコースに学びました。そして、そこから学んだのは「人間の本质には、国境などない」ということだったと言います。

「気候や風土、固有の伝統や文化の違いを考慮したうえで、ドイツ的な教育法をいかに日本風にアレンジしていくか。そこが一番大切なところだと考えています」

硬い雑穀。パンが好き

幼児教育のポイントには、学習能力や記憶力の強化ではなく、一人ひとりの子供が自分の内面を発達させていくための基盤づくりをサポートすることだと言います。園内の遊具を指して加納さんが説明してくれました。

「幼い子供には、模倣する力と素晴らしいファンタジーの能力があります。ひとつの木片に生命を吹き込み、それを一瞬にして船や自動車に変えてしまう。だからオモチャは、できるだけ素材で自然なものがいいんですよ」

「じゃがいもは、木になっっている」と言う子がいるほど、自然や農業と無縁な生活を送っている現代の子供たち。彼らに土に触れて、大地の恵みを肌で感じてもらいたいと、二十年ほど前、園は農園活動を始めました。そして、七年ほど前に、土づくりにから収穫まで「いのち」のサイクルを学ぶ「バイオ

せん。幼児は目的意識を持っておらず、ただ環境に適応しようと集中しています。そして、〈いま〉という瞬間が全てで、非常に敏感なのです。温かい環境を整えてあげるのが大人の役割です。そこから内なる感情が育まれてくるのです」

シュタイナーは人間の発育を七年ごとの三期に分け、第一期（〇〜七歳）は意志を、第二期（八〜十四歳）は感情を、第三期（十五〜二十一歳）は思考を育てる期間だと唱えました。

幼児教育の期間にあたる第一期に、きちんと意志を育てておかなければ、自分の意見を社会に反映できる人間に育たないのではないのでしょうか。

「自由とは奔放ではなく、意識の開放のことです。また、私たち保育者は〈教える〉のではなく〈生活を営む〉ことを子供たちに模倣させるのです。そこから人間の観知を学んでほしいですね。たとえどんなにモノや金があふれていても、それだけでは子供たちの眼は澄んだ輝きを放たないし、創造したり想像する力も養えませんからね」

そう語る加納さんの瞳には、自由な教育によって個の意識と自愛の心を育てようとする優しい光がありました。